



メソ気象学および雲物理学のメイリングリストの開設について

ここ数年来、気象研究所をはじめとする関東平野のメソスケール現象に興味を持つ数多くの研究機関が、研究者レベルの比較的緩やかな協力体制による共同研究である「つくば域降雨観測実験」を続けて来ました。この研究体制において、研究活動の情報交換を支援するために、mesorain という電子メールのメイリングリストを利用してきました。このメイリングリストは単に観測を支援するだけでなく、メソ気象に関するさまざまな情報交換の輪を広げることに大変有効であることが実証されてきました。そこでこの度これを一般のメソ気象学の領域に広げ、さらに雲物理学の分野も取り込んで、メソ気象学と雲物理学に関して情報交換あるいは意見交換が円滑にできるように、新しいメイリングリストを作成し、一般に公開することにしました。新しいメイリングリストは mesophia という名前で、そのインターネットアドレスは、

mesophia@ori. u-tokyo. ac. jp

です。メイリングリストの名前 mesophia は、meso と sophia を結合して作ったものです。-sophia とはギリシャ語で、それに対応する英語は-sophy です。これは philosophy などのギリシャ語からの借用語にみられる造語要素で、“science of” の意味を表す複合語を作ります。mesophia とは“science of mesoscale meteorology” の意味を込めて作りました。

この mesophia にはメソ気象学と雲物理学に興味のある方は誰でも参加することができます。大学や国立の研究機関だけでなく、民間の方も観迎します。気象学会には「メソ気象研究連絡会」がありますが、それに対応したものとして、この mesophia は電子メールを利用した一つのメソ気象学と雲物理学の学会のようなものと考えていただきたいと思います。このメイリ

ングリストにより日本のメソ気象学および雲物理学の研究者の情報交換が活発かつ円滑になり、気象学の研究が発展することを願います。

以下に、メイリングリスト mesophia の利用方法について説明します。

1. 参加者が上記のアドレスにメールを出すと、本メイリングリスト加入者にすべてそのメールが送付されます。自分にもメールがかえってきます。
2. このメイリングリストは（当然のことですが）加入者の誰でも自由に記事をポストできます。
3. このメイリングリストの世話人は当面東京大学海洋研究所坪木がやります。このメイリングリストに参加したい方は、自分のメールアドレスを1行書いたメールを、

tsuboki@ice3. ori. u-tokyo. ac. jp

までお送り下さい。たとえば天気さんが tenki@u-tokyo. ac. jp というアドレスで、参加したい時には、

To : tsuboki@ice3. ori. u-tokyo. ac. jp

.....

tenki@u-tokyo. ac. jp

として送信して下さい。改行して何か簡単なメッセージをつけていただくのも歓迎です。できれば signature をつけていただくと助かります。もし複数の参加がある時は、各行に一人ずつのアドレスを並べて書いて下さい。

また、このメイリングリストについての御意見、御質問等も tsuboki@ice3. ori. u-tokyo. ac. jp までお知らせ下さい。

に述べたように、先輩諸氏のご意見も伺い、より良い気象学講義にしたいと考えている。

(プール学院短期大学 富田 正夫)



気象庁技術報告第115号「平成5年冷夏・長雨調査報告」

平成5年(1993年)の夏期は全国的に顕著な低温・多雨・寡照となった。6～8月の3か月間の平均気温は平年よりも1～2℃低く、特に北日本の太平洋側では2～2.5℃低かった。このような低温は戦後最も著しい冷夏であった昭和29年(1954年)に匹敵し、また梅雨明けはこれまでの基準では特定できないほどの長雨となった。

このような特異な天候は日常生活はもとより各種の産業に著しい影響を及ぼしたが、とりわけ水稻を中心とした農業被害は甚大であった。水稻の全国作況指数は74と戦後最悪の不作となり、米の緊急輸入など国の基本政策に大きな影響を及ぼした。

この報告書は主として6～8月の西日本における長雨・寡照と7～9月の北日本と東日本における低温・

寡照の気象状況を詳しく記述している。第1章「天候の概要」では天候経過、極東域の天候、気温・降水・日照の特異性、主な冷夏・長雨年との天候の比較、気温・降水・日照の地域特性が述べられている。また、第2章「被害状況」では農作物の被害状況が地方別に記載されている。

平成5年の冷夏のように人が一生の間に1回しか経験しないような特異な天候に対し、それを事前に予測すること、また被害を予測しそれに対して十全な予防措置を講ずることは我々の理想とするところであるが、現状ではその期待に応えられていない。

この報告書が冷夏の大気現象としての理解を深め、農業被害の防止、軽減のために活用されることを期待したい。
(産業気象課)

題点は、事前の下見と準備を入念に行うことで、ある程度改善の余地がある。しかし、全体的に見て第1日目の会場はやや不十分であった。一方、第2、3日目の気象庁講堂は広さや設備の面では適当だが、台風や地震等の際に使用できなくなるために代替会場を確保

しておく必要があるという難点がある。また、これ以上受講者数を増やすことも困難である。夏季大学そのものの性格の再検討という基本的な課題とも関連するが、内容に合った適当な会場を探すことが運営上最も大切であると感じた。(教育と普及委員会)



気象庁技術報告第116号「平成5年(1993年)8月豪雨調査報告」

平成5年の夏は、梅雨前線および台風の影響により、西日本を中心に記録的な大雨が降った。特に、九州南部地方を中心に土砂崩れ等が発生し、人命や財産等に多大な被害があったことから、気象庁はこの豪雨についての調査報告書をまとめた。

報告によると、「今回の豪雨は、総観的には黄海にある低気圧から九州へ東南東に伸びている前線近傍で発現し、この点は昭和57年7月豪雨(長崎豪雨)とも類似していた。しかし、例えばレーダーエコーによると、豪雨の前半の期間では線状エコーが、後半では渦状エコーが現われたなど豪雨の性質が異なっていた。長崎豪雨は、今回の2つの期間の豪雨のパターンを合わせ持っていた」などと解析している。

一方、開発中の高解像度の数値予報モデルを使ったシミュレーション結果を示し、「前半の期間の豪雨は再現できなかった。後半の期間の豪雨はかなり良く再現されたが豪雨の予想位置にずれがあった」などとまとめている。また、豪雨予測についての今後の課題につ

いては、「集中豪雨の数値予報の精度は、時間・空間的にはまだ十分とは言えず、さらに予測精度を向上させるためには、前線付近の場の定量的な解析と初期化の手法等について検討する必要がある」などと報告している。

その他、豪雨に際して気象台は大雨警報や大雨情報を次々に提供したが、豪雨の地域が極めて狭いために、豪雨域から離れた住民にとって警報はハズレと受け取られたこと、また、大雨情報の内容や用語の意味も理解されていないことなどがわかった。情報を十分に活用してもらうために、防災気象情報全般についての啓蒙活動を強化するとともに、予報技術を改善し、警報の発表や伝達等についても見直しする必要性等が報告されている。

豪雨現象の理解ならびに災害対策のために、この報告書が参考になることを期待する。

(気象庁予報部予報課)



第18回オゾンシンポジウムのお知らせ

国際気象学・大気科学協会 (IAMAS) の国際オゾン委員会より、来夏に開催される第18回オゾンシンポジウム (XVIII Quadrennial OZONE SYMPOSIUM-96) について下記の案内 (2nd CIRCULAR) がありました。このシンポジウムは、オゾン層科学についても歴史が古く、権威のあるシンポジウムです。

開催日: 1996年9月12日 (木) ~21日 (土)

場 所: イタリア ラクィラ (L'Aquila) 大学

口頭発表: ポスタープレゼンテーションの要旨募集

締 切: 1996年1月31日

開催地の地理、交通の便と気候の案内

宿泊案内

参加費用案内 (詳細は次回の CIRCULAR にて) など

2nd CIRCULAR の必要な方は下記にお問い合わせ下さい。なお、インターネット上にオゾンシンポジウムのホームページが開設されていますので、NCSA MOSAIC 等のブラウザで <http://www.aquila.infn.it/o3symp> を参照することでも、詳しい案内が得られます。

問い合わせ先: 気象庁オゾン層解析室・梶原良一

TEL: 03-3212-8341 (ext. 4213)

FAX: 03-3211-7084

新入会員 個人 11名



気象研究所研究発表会のお知らせ

日時：平成7年12月4日(月) 14時～16時30分

5日(火) 10時～17時30分

場所：気象研究所講堂(茨城県つくば市長峰1-1)

プログラム

12月4日

- ・1995年兵庫県南部地震の震源過程
地震火山研究部 橋本徹夫
- ・伊豆大島体積歪計で観測された火山性単色減衰振動
地震火山研究部 神定健二
(東京大学地震研究所) 深尾良夫
(防災科学技術研究所) 堀 貞喜
(同) 藤田英輔
- ・地震空白域と地震予知 地震火山研究部 石川有三

12月5日

(午前)

- ・ガストフロント監視支援システム
気象衛星・観測システム研究部 葦澤 浩
- ・情報科学から天気予報に挑む
—人工知能・ニューラルネットワークの利用—
予報研究部 小泉 耕
- ・台風に伴う高潮の数値モデルによる予測と
その問題点 台風研究部 小西達男

昼休み

(午後)

- ・気候変動予測の可能性
—海面水温が大事か、陸面過程が大事か—
気候研究部 鬼頭昭雄
同 尾瀬智昭
 - ・北太平洋中層の数値モデリング
海洋研究部 山中吾郎
 - ・大気積雪系多重散乱モデルによる積雪の光学特性
物理気象研究部 青木輝夫
同 青木忠生
同 深堀正志
 - ・気象研究所におけるオゾンライダー観測
気象衛星・観測システム研究部 藤本敏文
 - ・放射性降下物の最近の状況
—死の灰のゆくえをさらに追って—
地球化学研究部 五十嵐康人
 - ・大気中粒子の雨雪等による沈着の解明とモデル化
応用気象研究部 吉川友章
- 問い合わせ先：気象研究所企画室
TEL 0298-53-8539 小原